

昭和女子大短大

○渡辺 満利子

横塚 昌子

食習慣の要因として、「食事パターン」、「食生活の満足度」、「タイプA行動パターン」を含む11要因と心身自覚症および臨床症状との関連性を分析した。調査は1987年、東京都内某人間ドック受診者、年齢35-59歳、男子、589名を対象に、食生活調査、タイプA行動パターン（Jenkins Activity Survey：JAS質問票による）、身体的・精神的自覚症状（Cornel Medical Index：CMI質問票による）に関しておこなった。なお、調査対象者の中で、タイプA行動パターンは、各年代とも約50%を占めていた。また、管理職では他の職種に比し、タイプA行動パターンの出現頻度は有意に高かった。

CMIによる身体的自覚症と11要因項目との関連性については、タイプA行動パターンを示すもの、食生活満足度の低いもの、喫煙習慣のあるもの、肥満者、運動習慣のないもので自覚症スコアが高かった。心臓脈管系・疲労度・疾病頻度自覚症(CIJ)との関連性では、食生活の満足度の低いもの、および高血圧者で自覚症スコアが高かった。一方、精神的自覚症スコアとの関連については、高卒以下のもので愁訴が高く、さらに食生活の満足度の低いもの、タイプA行動のもので高かった。なお、食事パターンでは有意ではなかったが、洋風偏食型、辛党偏食型は和風充実型、洋風充実型に比較し、心身の自覚症スコアが高値を示す傾向であった。

タイプA行動パターンと臨床データと有意な関連性は、総コレステロール値のみであった。また、従来から虚血性心疾患のリスクファクターといわれている喫煙とは関連性が認められた。

臨床データと10要因項目との関連性では、血圧と関連がみられた要因は年齢、肥満度、喫煙であり、職業、「食事パターン」とは拡張期血圧にのみ関連が見られた。総コレステロール値とは肥満度、HDLコレステロール値とは「食事パターン」、肥満度、喫煙、中性脂肪とは食生活の満足度、肥満度、喫煙、尿酸値は年齢、学歴、食生活の満足度、肥満度、消化器系とは年齢、学歴、肥満度、喫煙、胆膵系とは年齢、学歴、肥満度、肝機能系とは家族形態、肥満度、運動の習慣との関連性が認められた。

タイプA行動パターンは職業との関連性が認められ、とりわけ管理職者に多くみられた。社会的・経済的・心理的条件のもとで形成される食習慣が、タイプA行動パターンの影響をかなり受けており、虚血性心疾患の発症要因として好ましくない食習慣に関連していることが考えられた。